春の夜

芥川龍之介

これは近頃Nさんと云う看護婦に聞いた話である。Nさんは中々利かぬ気らしい。いつも乾いた唇のかげに鋭い犬歯の見える人である。

僕は当時僕の弟の転地先の宿屋の二階に大腸加答児を起して横になっていた。下痢は一週間たってもとまる気色は無い。そこで元来は弟のためにそこに来ていたNさんに厄介をかけることになったのである。

ある五月雨のふり続いた午後、Nさんは雪平に粥を煮ながら、いかにも無造作にその話をした。

×

×

X

ある年の春、Nさんはある看護婦会から牛込(うしごめ)の野田(のだ)と云う家(うち)へ行(ゆ)くことになった。野田と云う家には男主人はいない。切(き)り髪(がみ)にした女隠居(おんないんきょ)が一人、嫁入(よめい)り前(まえ)の娘が一人、そのまた娘の弟が一人、――あとは女中のいるばかりである。Nさんはこの家(うち)へ行った時、何か妙に気の滅入(めい)るのを感じた。それは一つには姉も弟も肺結核(はいけっかく)に罹(かか)っていたためであろう。けれどもまた一つには四畳半の離れの抱えこんだ、飛び石一つ打ってない庭に木賊(とくさ)ばかり茂っていたためである。実際その

夥しい木賊はNさんの言葉に従えば、「胡麻竹を打った濡れ縁さえ突き上げるように」茂っていた。

女隠居は娘を雪さんと呼び、息子だけは清太郎と呼び捨てにしていた。雪さんは気の勝った女だったと見え、熱の高低を計るのにさえ、Nさんの見たのでは承知せずに一々検温器を透かして見たそうである。清太郎は雪さんとは反対にNさんに世話を焼かせたことはない。何でも言うなりになるばかりか、Nさんにものを言う時には顔を赤めたりするくらいである。女隠居はこう云う清太郎よりも雪さんを大事にしていたらしい。その癖病気の重いのは雪さんよりもむしろ清太郎

だった。
「あたしはそんな意気地なしに育てた覚えはないんだがね。」
女隠居は離れへ来る度に（清太郎は離れに床に就いていた。）いつもつけつけと口小言を言った。が、二十一になる清太郎は滅多に口答えもしたこともない。ただ仰向けになったまま、たいていはじっと目を閉じている。そのまた顔も透きとおるように白い。Nさんは氷嚢を取り換えながら、時々その頬のあたりに庭一ぱいの木賊の影が映るように感じたと云うことである。
ある晩の十時前に、Nさんはこの家から二三町離れ

た、灯(ひ)の多い町へ氷を買いに行った。その帰りに人通りの少ない屋敷続きの登り坂へかかると、誰か一人(ひとり)ぶらさがるように後ろからNさんに抱(だ)きついたものがある。Nさんは勿論びっくりした。が、その上にも驚いたことには思わずたじたじとなりながら、肩越しに相手をふり返ると、闇の中にもちらりと見えた顔が清太郎と少しも変らないことである。いや、変らないのは顔ばかりではない。五分刈(ごぶが)りに刈った頭でも、紺飛白(こんがすり)らしい着物でも、ほとんど清太郎とそっくりである。しかしおととい喀血(かっけつ)した患者(かんじゃ)の清太郎が出て来るはずはない。況(いわん)や真似(まね)をしたりするはずはない。

「姐(ねえ)さん、お金をおくれよう。」

その少年はやはり抱(だ)きついたまま、甘えるようにこう声をかけた。その声もまた不思議にも清太郎の声ではないかと思うくらいである。気丈(きじょう)なNさんは左の手にしっかり相手の手を抑えながら、「何です、失礼な。あたしはこの屋敷のものですから、そんなことをおしなさると、門番の爺(じい)やさんを呼びますよ」と言った。

けれども相手は不相変(あいかわらず)「お金をおくれよう」を繰り返している。Nさんはじりじりじり引き戻されながら、もう一度この少年をふり返った。今度もまた相手の目鼻立ちは確かに「はにかみや」の清太郎である。Nさん

は急に無気味になり、抑えていた手を緩めずに出来るだけ大きい声を出した。

「爺やさん、来て下さい！」

相手はNさんの声と一しょに、抑えられていた手を振りもぎろうとした。同時にまたNさんも左の手を離した。それから相手がよろよろする間に一生懸命に走り出した。

Nさんは息を切らせながら、（後になって気がついて見ると、風呂敷に包んだ何斤かの氷をしっかり胸に当てていたそうである。）野田の家の玄関へ走りこんだ。家の中は勿論ひっそりしている。Nさんは茶の間へ顔

を出しながら、夕刊をひろげていた女隠居にちょっと間の悪い思いをした。

「Nさん、あなた、どうなすった？」

女隠居はNさんを見ると、ほとんど詰るようにこう言った。それは何もけたたましい足音に驚いたためばかりではない。実際またNさんは笑ってはいても、体の震えるのは止まらなかったからである。

「いえ、今そこの坂へ来ると、いたずらをした人があったものですから、……」

「あなたに？」

「ええ、後からかじりついて、『姐さん、お金をおく

れよう』って言って、……」
「ああ、そう言えばこの界隈には小堀とか云う不良少年があってね、……」
すると次の間から声をかけたのはやはり床についている雪さんである。しかもそれはNさんには勿論、女隠居にも意外だったらしい、妙に険のある言葉だった。
「お母様、少し静かにして頂戴。」
Nさんはこう云う雪さんの言葉に軽い反感――と云うよりもむしろ侮蔑を感じながら、その機会に茶の間を立って行った。が、清太郎に似た不良少年の顔は未だに目の前に残っている。いや、不良少年の顔ではな

い。ただどこか輪郭のぼやけた清太郎自身の顔である。

五分ばかりたった後、Nさんはまた濡れ縁をまわり、離れへ氷嚢を運んで行った。清太郎はそこにいないかも知れない、少くとも死んでいるのではないか？――そんな気もNさんにはしないではなかった。が、離れへ行って見ると、清太郎は薄暗い電燈の下に静かにひとり眠っている。顔もまた不相変透きとおるように白い。ちょうど庭に一ぱいに伸びた木賊の影の映っているように。

「氷嚢をお取り換え致しましょう。」

Nさんはこう言いかけながら、後ろが気になってな

らなかった。

×　　×　　×

僕はこの話の終った時、Nさんの顔を眺めたまま多少悪意のある言葉を出した。

「清太郎？――ですね。あなたはその人が好きだったんでしょう？」

「ええ、好きでございました。」

Nさんは僕の予想したよりも遥（はる）かにさっぱりと返事

をした。

（大正十五年八月十二日）

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年３月24日第１刷発行
１９９３（平成５）年２月25日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年２月１日公開
２００４年３月７日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。